日本文明研究所

JAPANESE CIVILIZATION INSTITUTE

24-5 Sakuragaoka-cho, Shibuya-ku, Tokyo 150-0031
Tel: 03-5456-8082 Fax: 03-5456-8388
Mail: info@japancivilization.org
http://www.japancivilization.org/

ニューズレター No. 13 2018年秋号

2018年8月28日、日本文明研究所の第13回シンポジウムが行われました。「五感を研ぎ澄ます　日本古来の香りと音とは?」と題した本シンポジウムには、志野流香道21世家元継承者の蜂谷一枝軒宗苾氏が登壇し、香道とは何か、その歴史を繙き、現在と未来をも語られました。またその終わりに、クリスタルボウル奏者の石塚麻実氏が「祇園精舎の鐘の声」とはこの音色ではないか、と言われるクリスタルボウルを演奏。モデレーターは作家で当研究所所長の猪瀬直樹氏が務めました。日本の文化を知るところから現代を省みる貴重な機会となりました。その内容の一部を載録いたします。

（『週間読書人』2018年11月16日号　第3264号ならびに『WEB 読書人』より転載）

第13回シンポジウム報告

五感を研ぎ澄ます
——日本古来の香りと音とは?

蜂谷 一枝軒 宗苾 × 石塚麻実（クリスタリスト麻実）

モデレーター 猪瀬直樹

世界中の香りの文化

猪瀬　若い頃愛読していた、柳田國男の『明治大正史 世相篇』には、香りについての記載がありました。日本アルプスの案内人が「山中に、今日はもう誰か入っていますね」と、匂いで分かるのだと。大正時代に書かれたものですが、近代化によって失われていく音や香りについて詳細に描かれているものです。

香道は日本独特のものです。我々は普通匂いを「嗅ぐ」と言いますが、香道では「聞く」と言います。

森鷗外の「興津弥五右衛門の遺書」は、細川家と伊達家の香木争奪の史実を元に、書かれた小説です。細川三斎が、家臣である興津弥五右衛門と横田清兵衛を、茶事のための珍しい品を買ってくるようにと命じて長崎に送り、二人は最高級の伽羅を手に入れようとする。ところが香木は非常に高価なので、横田は本木と末木（うらき）のうち、質の劣る末木を買い求めればいいのではないかと言う。興津は主の命を守るべきだと主張し、言い争いが高じて横田を切ってしまう。結局、細川家が本木を、伊達家が末木を手に入れることになるのですが、その歴史的な香木が、蜂谷さんの家には伝わっているんですよね。

今日は蜂谷さんに、香道とは何ぞやということを、話をしていただきます。

蜂谷　私の父は、香道志野流の現家元で、その家の長男に生まれたところから、私の全てが始まっています。いまはこの香道という文化を継承して、次の世代に残していく使命感から、日々稽古をしています。

江戸時代には、現在の青森県にあたる南部地方から、現在の大分県にあたる豊後国まで、地方大名もみな香道をたしなみました。ここから近いところでは、江戸城の大奥の奥女中も、志野流の香道を行いました。当時の日本は鎖国の時代でしたが、たくさんの香木が長崎の出島に入り、武家では香木を買い求めてその香りを楽しんでいたのです。香木を楽しむためには、細かい作法があります。それを教え伝えるのが家元の役目で、五百年間変わらぬかたちで、作法を伝授してきました。

香道の稽古、とは何をするのか……ひたすらお香を聞くのです。香道は口伝の世界で、書物はほとんどありません。私も、祖父や父のお香を聞いている姿を見て、真似ていきますし、むしろ香木が導いてくれる世界だと感じています。香道という「道」を一生かけて探究します。自分を知るということも、香道の探究する課題の一つと考えて、日々香を聞いています。

猪瀬直樹所長

*

ここで大きく時代を遡りますが、火を手に入れた時代原始時代は、動物たちと同じく人間にとっても、五感の内で嗅覚が最も重要でした。現代社会は視覚や聴覚が優位だと言われますが、人間が自然に身を置いて暮らした時代には、敵と味方を判断したり、食料と毒を区別したり、生きるも死ぬも嗅覚の力によるところが大きかった。

遥か昔から、世界中に香りの文化がありました。例えば古代エジプトには、奴隷に香を焚かせているクレオパトラの絵が残っています。また古代中国には、最古の漢字である甲骨文字に「香」があります。

蜂谷 一枝軒 宗苾氏

新約聖書では、イエス・キリストが生まれたときに、東方の三博士が贈り物を持ってやってきます。一つは黄金。あと二つは乳香と没薬（もつやく）という香料です。つまり香料は、黄金と価値が同じだということです。没薬はミルラとも呼ばれ、ミイラの語源であると言われます。ミイラを作るときに、防腐効果がある没薬を利用していたことからです。

上へ上へと昇る煙を、昔から人は、天と自分たちを繋ぐものと見なしていたようです。いまでも天皇が即位するときには、神に伝えるために香を焚きます。ちなみに神様にも香りがあって、高貴な神様になればなるほど、いい香りがするそうです。また仏教では人が亡くなると、終日線香を焚き続けますが、あれは仏様の食べ物なので、絶やしてはいけないとされています。法華経では、お釈迦様が説法するときは、言葉ではなく香りでしたと言われています。

そうしていろいろな香文化が流れ込み、昇華され、最終的な作法として極まったものが、香道の「灰点前」です。香炉の灰の中に火種を埋め、灰を山型に整えて、その山の頂に銀葉という小さな雲母片をおき、その中央に香木を一片おくのです。灰手前は見た目の美しさも大事ですが、火種の火加減が重要です。山の高さが一ミリ高いか低いかで、香りが変わってしまいます。灰点前では、非常に細やかな作法が要求されます。

日本独自の香道の誕生

蜂谷　今日はせっかくですので、会場の皆さんに、実際に香木を聞いていただこうと思います。本来ですと、香炉の正面を外し、また自然界に感謝する心持ちで、戴いてから香りを聞きます。でも今日は作法は気にせずに、香りを楽しんでください。香炉を水平に扱うために、左手でしっかりと持ちます。右手の親指を香炉の手前に、香りをカバーするように器を右手で覆って、鼻を近づけます。ゆっくり三回吸い込んで、香りを聞いてください。香木は薬でもあるので、ゆっくり体の中に取り入れることにより、心身の浄化にも繋が

（右から順に）香道の「灰点前」。香炉の灰の中に火種を埋め、灰を山型に整えて、その山の頂に銀葉という小さな雲母片をおき、その中央に香木を一片おく。

っていきます。

日本の香文化は、淡路島に香木が漂着して始まります。推古天皇三年（西暦五九五年）のことだと言われます。

平安時代の四百年間は、香道は始まっていないものの、貴族たちによって、香りはとても大事にされました。『源氏物語絵巻』には、光源氏の衣装に香りを付ける場面が出てきますが、貴族一人ひとりに香のレシピがあり、着物や髪の毛、手紙、居住空間などに独自の香りを焚きしめたのです。香木は今も昔もとても貴重なものですから、それを手に入れることができ、正しく使用出来る教養を併せ持つ地位の人たちのステイタスでした。

その後、鎌倉時代には禅宗が日本に入ってきます。日本の文化の根底にはどれも、禅の精神が生きています。志野流でも家元継承者は代々、禅寺に身を置きます。私も二十代の半ばに、一年間修業に行きました。

武士にとって、香木には穢れを落す意味がありました。お香を聞いていただくと分かりますが、こころが落ち着きますよね。武士たちは香木を戦場に持って行き、「聞香（もんこう）」することにより、香りと命の儚さを照らし合わせたり、少しでも疲弊したこころを香りで癒そうとしたのではないでしょうか。

聞香のデモンストレーション

日本独自の香道が作られる要素として、もう一つ加えるとすれば、日本の風土です。島国である日本は、台風や地震、津波に繰り返し襲われてきました。そうした死生観と、四季の移ろい、それら全てが相俟って、仄かに漂う香りを道として極める香道が、室町時代に誕生します。

誕生した場所は、銀閣寺です。足利義政の元に志野流の初代家元、志野宗信が仕え、香道を作ります。それから父の代まで二十代、作法を変えず続いています。

京都の銀閣寺には、志野流の始まった部屋が、改築されつつ、残されています。現在、銀座や原宿にも、志野流の教室がありますが、そのお点前はすべて、銀閣寺の間取りを元にしています。歩幅や歩数、手の動き、全ての作法が銀閣寺で定まったもので、それを五百年かけて、洗練するように伝えてきたということです。

志野流の香炉の灰のかたちには、陰陽五行の考え方が入っています。つまりこの小さな香炉の中に、宇宙があるという考え方です。その山の頂きに、自然界の恵みである香木をおく。「聞香」と言いますが、香道は日常で使用している嗅覚で捉えるだけでなく、自然界、宇宙とこころで向き合う意味合いがあります。中国では「聞」という漢字には、五感で感じ取るという意味があるそうですが、時間をかけて稽古をしていくと、いずれ香木、自然界からのメッセージを感じ取れるようになります。

＊

では具体的に、香道ではどんなことをするのか。普段のお稽古では、組香という香り当ての遊びをしたりします。

猪瀬　香道を極めていく過程の中に、遊びの要素も入ってくるんですね。

源頼政という、鵺を退治した武将

がいます。その源頼政のエピソードが、香道の遊びの一つになっているそうですね。

蜂谷　はい。「菖蒲香」という組香です。

怪物・鵺を退治したので、鳥羽院がとても喜ばれて、頼政に褒美を与えようと。頼政は、好きな女性と一緒になりたいと願います。その女性は菖蒲御前という美しい人なのですが、鳥羽院の側にいた女性なので、鳥羽院は何でも褒美をとらせると言いながら、頼政にいじわるをするんです。菖蒲御前とそっくりの女性を四人並ばせて、本人を当てよという問題を出します。

猪瀬　当時は部屋が暗くて、男女が明るい場所で会うことがないから、難しいんですよね。

蜂谷　自信がない頼政は、和歌でこのように答えます。「五月雨に池のまこもの水ましていつれ菖蒲と引きそわつらふ」。雨がたくさん降ってきて、水かさが増したために花が隠れてしまい、真薦の中から菖蒲を引き当てることが難しいと。自分の心境と外の情景を、重ね合わせて即興で読みました。芸は身を助けます、鳥羽院が感心し、この和歌のおかげで、頼政は菖蒲御前と一緒になることができました。そんなエピソードを元にした遊びが、香道にはあるのです。精神性と同時に文学の素養も香道には必要で、作法だけでなく『古今集』や『源氏物語』などの日本の古典も学びます。

香木いまむかし

蜂谷　世界中で取れる香料には、ご存じの物がたくさんあると思います。料理で使うスパイスもあります。桂皮（シナモン）、丁子（クローブ）、大茴香（スターアニス）。動物性の香りでは、麝香（ムスク）は有名ですね。雄のジャコウジカの腹部にある小さな袋ですが、とても強い香りで、十数キロ先の雌鹿を呼ぶとか。それから、龍涎香（アンバーグリス）は、マッコウクジラの腸内にできる結石で、とても貴重なものです。これらは中国では全て漢方です。それから、先程話にでてきた伽羅ですね。白檀は志野流では使いません。それから沈香。沈香の最もクオリティの高いものが、伽羅だと思ってください。

香木は日本では取れません。近いところでベトナム。ラオス、カンボジア、インドネシア。最近はパプアニューギニアでもみつかっています。インドまで行くと、沈香や伽羅は取れず、白檀のみです。アフリカでは香木は見つかっていません。それが大陸や海を渡って、日本に入ってきます。経由地は、香港です。香港は、香木の集積地でした。香りのよい港ということで、名付けられたのでしょうか。

香木の分類は「六国五味」と言い、伽羅、羅国（らこく）、真南賀（まなか）、真南蛮（まなばん）、佐曾羅（さそら）、寸聞多羅（すもんだら）の六国と、甘、辛、酸、苦、鹹の五味を基準とします。香木は産地によって香りが違い、六国はワインで言うボルドー、ブルゴーニュ、シャンパーニュといった、産地から来る銘柄に当たります。しかしかつては産地で分類していたのですが、最近では家元が、自分の嗅覚により香りを分類するようになりました。何度も何度も香りを聞いて、一年程かけてこれは伽羅だな、これは羅国だな、と鑑定します。

香木には味もあります。一つの香木に二味、三味あるのが普通です。

そして、六国五味を判定したのち、それぞれの香木に名前を付けます。香りから季節を感じたり、風景を想像したりして、似つかわしい和歌を『古今集』や『新古今集』などから探すのです。当然、香りと名前はぴったり合致しないといけません。難しい作業です。

＊

徳川家康は、香木の一番のコレクターでした。直接原産国に注文の書状を送り、朱印船貿易の中で香木を輸入しています。それを家康が駿府に隠居する際に、水戸、尾張、紀伊の御三家に分け与えました。尾張徳川家には三千から四千の香木があり、私の祖父が昭和九年に、その全てを鑑定しました。

香木は、竹紙に包み、木箱に入れて、温度・湿度を管理し、五百年、

千年と香りを保たせていきます。そうすることによって、香りを通して、歴史上の武士や貴族、天皇たちと、会話することができるのです。

猪瀬　蜂谷さんのところで、いろいろな香木を見せていただきましたが、香木というのは樹木に菌が入って、異化作用のような化学変化が起きている、ということになるのでしょうか。

蜂谷　人間でいうと病気ですね。

猪瀬　一本の木でも、一方の側に化学反応が起きていて、反対側は起こっていない。つまり香りの高いところと、あまり香りのない部分があって、本木と末木とでは、全く価値が異なる。森鷗外の小説にも、その事実が描かれているということですね。

蜂谷　自然発生的に枝が折れたりなどしたときに、樹木は樹脂を傷ついた一点に集めるのです。昆虫やバクテリアに食べられてしまわないように、傷口の内側に、人間でいうところの瘡蓋を作ります。樹液で傷を固めるとその内側に化石化が広がり、うまくいくと香木となる。

猪瀬　例えば、伽羅の香りは、何という言葉に置き換えたらいいのかな。

蜂谷　私たちの世界では「宮人の如し」と言います。華やかな香りを指しています。香木それぞれに、武士だとか、百姓だとか、僧だとか、いろいろな言葉が当て嵌められるのですが、中には現代にはそぐわない言葉もあります。例えば真南賀という香木は、「女のうち恨みたるが如し」、つまり、女の怨みのような香りだと。

猪瀬　人間の内面を通過した表現ですね。

　蜂谷さんのお宅、志野流家元の屋敷は、名古屋にありますね。なぜ京都の足利義政のところで始まっているのに、京都ではなく名古屋に屋敷があるのですか。

蜂谷　幕末の十五代目のときに戦乱があって、京都の家が焼けてしまったんです。

猪瀬　蛤御門の変ですか。京都の六割が焼失しますね。そこで志野流の屋敷も燃えてしまったと。

蜂谷　いい香りがしたのではないかと思います（笑）。困っていたときに、助けてくださったのが、尾張徳川家で、十五代目は名古屋に引っ越しました。私は、二十一代目になる人間として、自分の事業としては家を京都に戻そうと考えています。ルーツに身を置くのが、自然だと思うので。それを徳川さんに話したら、誰のおかげでいまがあるんだ、と叱られましたけれど（笑）。

＊

　冒頭で猪瀬さんより話のあった「一木三銘香」、これはあまりにもいい香木なので、奪い合いになりました。本来は、一つの香木が一つの存在ですから、割るなどもってのほかですが、それを割り、その過程で切腹事件も起きています。細川家が所有するものが「白菊」、伊達家の「柴舟」、前田家あるいは小堀遠州に伝わる「初音」、もう一つ、一部分を宮中に献上して「藤袴」と名付けられ、「一木四銘」とも呼ばれます。こうした歴史的な香木が、現存しています。

　また私たちの世界で一番有名な「蘭奢待（らんじゃたい）」という香木があります。これは奈良の正倉院に秘されていますが、全長は一・五mほど。聖武天皇の時代から大事に保管されてきた、相当に古いものですが、長い歴史の中で三人だけ切り取ったと言われています。一四〇〇年代に一人、一五〇〇年代に一人、一八〇〇年代に一人です。一番右端は、足利義政です。香道が生まれたときの将軍ですね。その真横を切り取ったのは、自分も取れるんだぞ、自分はすごいんだ、と周囲に見せつける人……織田信長です。そのとき志野流の家元も付き従っていて、その由縁で蘭奢待の一部が当家にも伝わっております。ただどこにあるかは僕も教えてもらっていません。その一部は徳川家に献上しています。一八〇〇年代は明治天皇です。

　正倉院は東大寺にあります。蘭奢待の漢字をよく見ると、東大寺の文字が隠されているのが分かりますか。隠し文字というのですが、洒落た遊びごころです。

自然への感謝、香道の課題

蜂谷　家元の中に、一人だけ女性がいます。基本的には、一子相伝で長男が継ぎますが、十七代目は百枝という女性の家元です。

　家元は普段、寺社で神様や仏様にお香を焚きます。神様用と仏様用とでは、作法が変わります。

　上賀茂神社を始めとする神様にお香を届ける場面では、口に紙を挟みます、それは神様に息を吹きかけてはいけないからです。家元は、導服

という特別な衣装を着て、特別な道具、特別な作法で香を届けます。この作法は秘伝なので、いまは父しか知りません。そのうち私も教えてもらうことになります。

志野流に入門すると、家元からの伝授があります。許状といって、免許状を伝授されながら、ランクアップしていくのです。志野流では八伝ほどあって、最後は免許皆伝です。年齢も七十歳を超えないと免許皆伝とはなりません。

志野流の作法は、とても細かいです。畳一目も異なってはいけません。五百年かけて、美しいたった一つの作法を作り上げてきた。その完成された作法を目指して、お弟子さんたちは稽古しています。ただロボットのように動いてもダメで、一つひとつの動きにこころをこめないと、香木にばれてしまいます。気持ちが籠らないお点前では、いい香りがしません。逆に心を籠めた、自然界に感謝したお点前は、香木に伝わりいい香りがしてきます。作法は大事ですが、香道は最終的にはテクニックではないんです。人と人は心で通じ合いますが、その波動は香木にも伝わるということです。

*

香道には、例えば「松竹梅香」という遊びがあります。三つの香りを覚えて、その順番を当てるというゲームですが、零点の人、一点の人、満点の人は「叶」と、点数が出てきます。香道には、書の心得も必要ですし、文学、漢詩も勉強しなければいけない。時間がかかります。ただ、お稽古は楽しいですよ。

それから「源氏香」という、香道の遊びもあります。図は五十二通りあって、源氏物語五十四帖のうち、「桐壷」と「夢浮橋」以外の帖の名を使った組香です。五つ連続して回ってきた香炉の異同を当てます。例えば、五つ聞いたときに、一番目と二番目の香が同じで後は異なると思ったら「空蟬」です。また全部違う香だと思えば「帚木」。「末摘花」は一番目が違い、あとは全部同じ香りの組合せ。そんなふうに、五種の香当てが五十二通りの図で示されているのです。これも、志野流の組香の一つです。

香を楽しむための道具もいろいろあって、例えば伏籠という、香炉の上に伏せて、上に衣服をかけ、香りを焚きつける籠があります。それから大事な香木をしまっておく香篳笥。香枕と言うものもあります。枕の中に香を入れて寝るのですが、いい夢が見られそうですね。それから十種香箱とは、お香の道具が一つの箱の中に全て入ってしまう道具です。よく知らない人が出してしまうと、二度と入らない、非常に手の込んだ作りです。またお香のゲームに使う双六のような盤物と言われるものがあります。香りを当てると馬が走り、三馬身離れると落馬するのです。こういった香道のための道具も、それぞれに作法が決まっています。

猪瀬　よく平安時代の物語などに、着物の袖に香を焚きしめる、などと出て来るけど、これはどういう仕組みなの？

蜂谷　袖香炉、鞠香炉というものがあります。大きさは野球ボールぐらいで、ジャイロスコープになっており、どのむきに転がっても水平が保たれます。鞠の中に火種とお香を入れれば、風が吹くたびにスッといい香りがする。香水とは全く違う香りです。こういった技術には、シルクロードを通して伝わってきたものもあります。そうした技術を、香炉に応用したということでしょう。

猪瀬　ジャイロスコープの技術が、シルクロードから入ってきたと。

蜂谷　と、言われています。そうした技術を、香炉に応用したということでしょうか。

千鳥の香炉はご存知でしょうか。義政から、時の将軍たちが代々手中に収め、伝えられてきた香炉ですが、秀吉の手元にあったとき、石川五右衛門がこの香炉を盗みに入ります。すると、香炉の千鳥が鳴いて、五右衛門は捕まってしまった。そんな話が伝わっています。この香炉も現存しています。

それから志野流の独自の道具に、志野袋というものがあります。お香のお点前では香りが混ざってしまうので、花は飾りません。その代りに、志野袋に結んだ紐で、季節の花をかたち作り彩を添えるのです。梅、桜、藤、葵、菖蒲、蓮、朝顔、桔梗、菊、紅葉、水仙、雪持ち笹と十二ヶ月分の、季節に合わせた紐の結び方があります。これも五百年間、口伝で伝えられてきたもので、教本などはありません。秘伝ですが裏十二ヶ月もあります。また、伝授が上っていくと、鶴や亀、免許皆伝となれば、蜻蛉の結び方を教わります。

*

茶道の流派は多く、一つの流派に十万人ぐらいの人口があります。華道はさらにたくさんの人が嗜んでいます。茶道、華道と、香道との違いは、素材が限られていることです。花も茶も、日本国内で採取できる、栽培できる、毎年取れる。香木は三重苦ですね。日本で取れない、基本的に栽培できない、できるまでに百年ぐらいかかる。流派も二つしかありませんし、香道人口は志野流だけで、二千から三千人程。入門前の人も入れれば、もう少し増えますが、一万人には届かないと思います。ただ、そもそも人口を増やすことは目的にしていません。

猪瀬　具体的に入門したいとなったら、どうやって弟子になる方法があるんですか。

蜂谷　東京には約三〇個所、全国には約二〇〇個所、海外にはパリや北京などに教室があります。興味がある方は、来ていただければと思います。が、入門は一生ものなので、数回お稽古した方に、はいどうぞ、とはなりません。入門のお願いをして受け入れられたら、家元とともに一生かけて、香りの道を行くことになります。途中で止めることはできません。

＊

香木はこれまでに人間が取りつくし、今はアラブや中国の方々も欲しがるので、どんどん希少になってきています。

香木がなくなったら、香道が成り立ちませんので、父は家元で初めて、ベトナムで植林をしました。もちろん千本植えても、全てが香木にはなりませんので、あとは自然に任せます。父も私もこの世にいなくなって、私の子どもか孫が、ひょっとしたら使うかもしれません。

先ほど、香木は栽培できないと言いましたが、なんと最近では栽培が試みられています。人間の技術は、日進月歩です。香木は中国のビジネスマンが、通常百年かかるものを、十年で作り始めています。百年かかったらビジネスにならないですからね。香木は海南島や広東省で作り、北京で売られます。先日品評会に行きましたが、こぶし大の人工香木で、三百万円ほどでした。中国には香を聞く文化は基本的にはありませんので、そのまま焚いたり、漢方として煎じて飲んだり、数珠に仕立てたりして使われます。

私は、日本だけでなく、世界中に

香りを届けるのが仕事だと考えています。香りで国と国を繋げたり、人と人を繋げたいと。

アラブのバーレーンには、香木をどのように使っているのかを確かめたくて行ってきました。炭の上に直接香木を置いてしまうので、高価な香木なのですが、ただ煙いだけでした。今日は、香木は爪の先ぐらいに小さかったですね。香道ではまず、自然に感謝するこころがなければだめだと思っています。またそのことを、伝えに行こうと思っています。

最近、幼稚園にも行き始めました。できれば子どもたちに、都会は、無機質な匂いの空間となっています。もしくは科学香料が多すぎます。柔軟剤の芳香も強くなっていますよね。天然香料は高価ですので、それだけを使うのは無理だと思いますが、子どもたちに、できるだけ自然の香りの記憶を残したいと思っています。

いろいろ話しましたが、本当は私の話より、香木がいろいろなことを教えてくれます。香道の一番大事なことは、自然界からの声を聞くこと。父、祖父、もっと以前の家元たちが繋いできた香道を、一生かけてお香を聞き、しっかり受け継いでいきたいと思います。

祇園精舎の鐘の声
——クリスタルボウル

猪瀬　『平家物語』が「祇園精舎の鐘の声　諸行無常の響きあり」で始まるのは、よく御存じだと思いますが、「祇園精舎の鐘の声」とは、どういう音なのか。

祇園精舎を江戸時代初期に、東南アジアまで探しに行った人がいるらしいのですが、アンコールワットに行ってしまって、後で間違いだったと分かる。結局、仏教が伝来したインドに、祇園精舎もあっただろうと言われているそうです。

祇園精舎とは、僧侶が亡くなるときに最後に過ごす場所らしいのですが、鐘はよく寺で見かける梵鐘ではなく、風鈴のようなかたちをした水晶だと。水晶がぶつかりあう音が四方にあり、その音色を聞きながら、自然に溶け込むように命が消えていく、そういう場所があったらしいのです。

石塚麻実氏

その音色をいま再現するとしたら、この音ではないか、というのがクリスタルボウルです。いろいろな色と大きさがありますが、どれも素材はクリスタルで、この音を聞くと、脳内にアルファ波が出ると言われます。これから、クリスタルボウル奏者の石塚さんに演奏していただきます。

石塚　いまご紹介いただいたように、クリスタルボウルは、水晶を粉砕し、器状にしたものです。この音を聞くと、アルファ波が出ます。アルファ波はマッサージを受けたり、温泉に浸かったり、癒されている状態のときに出てくる脳波で、早い方は、クリスタルボウルを聞き始めて数十秒で、この脳波が出てきます。本当に、あっという間にリラックスできる楽器で、ぐっすり眠れたり、脳の疲れが取れたり、忙しい現代人にはぴったりです。

いろいろな色があるのは、水晶に他の鉱石が練り込まれたり、吹きつけられたりしているからです。他の鉱石の周波数も、音に乗ります。パワーストーンをご存じかと思いますが、鉱石によって一つひとつ効果が違います。それぞれの鉱石の持つ波動が、クリスタルボウルの音に乗ってくるのです。

ボールごとに周波数が違い、体の部位にもそれぞれ周波数があるので、尾骶骨のあたり、丹田のあたり、胃のあたり、とそれぞれのボールごとに細かく対応しています。叩いてい

クリスタルボウルを奏でる石塚氏

る棒はマレットといって、山羊の皮がなめしてあります。

人間の可聴域は十六ヘルツから一万六千ヘルツと言われますが、クリスタルボウルからは五万ヘルツ出ていますので、耳に聞こえない細かい周波数によって、リラックスしたり、自己治癒力を高めたりする効果があります。

もともとエジプトの壁画に描かれていた古代の人たちが使っていた楽器を、四十年ぐらい前に現代に甦らせた、というのがクリスタルボウル誕生の有力な説となっています。いつもは演奏を寝ながら聞いていただいています。今日は椅子に座った状態ではありますが、目を閉じて、寝てしまっても構いませんので、リラックスして聞いていただけたらと思います。

*

猪瀬　今日は「五感を研ぎ澄ます」というテーマで、シンポジウムを行いました。今、我々はヨーロッパ近代から受け継いだ社会の中で、たくさんのものを失っていっています。近代というスタンダードだけで物を考え続けていると、見失うものがあるのではないか。本来、人間にはもっと違う生き方のかたちがあるのかもしれない。私たちは、日本独自の文化や思考から離れ、記憶喪失のようになっているところがあるのかもしれません。その辺りを考え直す意味で、蜂谷さんには、本来は我々が当たり前に知っていなければいけない、香道についてお話いただきました。そして、石塚さんには、『平家物語』の「祇園精舎の鐘の音」を体験させてもらいました。現代社会の中で、沈んでしまっている日本文化を、時には撹拌してみたらよいと、そう思うのです。

（『週間読書人』二〇一八年二月二六日発行第三二六四号ならびに『WEB読書人』より転載）

講演者紹介

蜂谷 一枝軒 宗苾（はちや・いっしけん・そうひつ）

志野流香道 21世家元継承者。1975年生まれ。室町時代より20代500年に亘り香道を継承し続けてきた志野流の第20世家元蜂谷宗玄の嫡男。 2002年より大徳寺530世住持泉田玉堂老大師の下に身を置き、2004年玉堂老大師より軒号「一枝軒」宗名「宗苾」を拝受、第21世 家元継承者となる。現在は、次期家元として全国教場及び海外教場等での教授、幼稚園から大学での講演を開催し、世界各地で 啓蒙活動を行っている。香道という日本独自の香り文化を通し各国との交流を図り、文化によって世界を繋げるという思いのも と活動。香道をユネスコの無形文化遺産登録に向けて。また、稀少になった「香木」を後世に遺していくためベトナムでの植林 活動、それに準ずるエコ活動を『環境道』と題し講演活動も行っている。平成21年度文化庁海外文化交流使、池坊文化学院講師、フランス調香師協会名誉会員

石塚麻実（いしづか・あさみ）

一般社団法人クリスタルボウル・アカデミー・ジャパン代表理事、クリスタルボウル・アカデミー・ジャパン株式会社代表取締役

東京都出身。大手企業に就職。役員秘書や人事担当を13年間務めて退職。ハウスクリーニング業の起業を経て、クリスタルボウル演奏家に。2013年キングレコード(株)よりクリスタルボウル演奏家初のCDメジャーデビュー。2014年、第2弾CDをリリース。各地の神社仏閣での奉納演奏も得意とする。伊勢神宮や出雲大社での奉納演奏の他、富士吉田新屋山神社で9年連続奉納演奏。新潟県弥彦神社、湘南江ノ島神社、戸隠神社、沖縄沖宮神社他、多数奉納。女性起業家としても活躍しており、ビジネスセミナーや法人設立パーティーなどの出演も多数。著書に「聞くだけで脳の疲れがとれるCDブック」(ダイヤモンド社)

猪瀬直樹（いのせ・なおき）

作家。1946年生まれ。87年『ミカドの肖像』で第18回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。『日本国の研究』で96年度文藝春秋読者賞受賞。2002年小泉首相より道路公団民営化委員に任命される。07年6月東京都副知事に。12年12月に東京都知事に就任。13年12月辞任。15年12月に大阪府市特別顧問に就任。代表作に『昭和16年夏の敗戦』『ペルソナ三島由紀夫伝』『ピカレスク 太宰治伝』。近著に『救出』『戦争・天皇・国家』『民警』『東京の敵』『国民国家のリアリズム』（共著）『明治維新で変わらなかった日本の核心』（共著）。

日本文明研究所 2018 第14回 シンポジウム

2020年までは東京オリンピック・パラリンピックが目標としてあるが問題はその先だ。平成後の新時代のビジョンを語ろう。メディアアーティストの落合陽一氏と当研究所所長の猪瀬直樹が語り尽くします。

特別講演

2021年以後の ニッポンを考える

落合洋一氏
メディアアーティスト、Pixie Dust Technologies Inc. CEO、
筑波大学准教授・学長補佐

Masato Kato

司会 猪瀬直樹氏
作家、日本文明研究所所長

日時：2018年12月5日（火）
19時～21時（18時30分開場予定）

会場：日本経済大学東京渋谷キャンパス246ホール
（定員100名）
〒151-0031　東京都渋谷区桜丘町25-17

参加費：2000円（当日、受付にてお支払いください）

参加申込先：下記のサイトよりお申込み下さい。
http://www.japancivilization.org
お問い合わせ先　一般財団法人日本文明研究所
TEL 03-5456-8082

伝統工芸品 紹介サイトのご案内

JAPANESE CIVILIZATION INSTITUTE

海外サイト：https://shops.japancivilization.org
日本国内サイト：http://japancivil.shop9.makeshop.jp

所長からのメッセージ

日本文明研究所では、シンポジウムに加え、伝統工芸品の紹介と販売を行っております。日本には現在約1200の伝統工芸品があるといわれますが、それらの生産基盤が衰退しつつあるのが現状です。当研究所は、活動の一環として、全国の貴重な伝統工芸の品々を掘り起こし、永々と受け継がれてきた日本人の匠の技や美を皆様とともに堪能し、育んでいけることを願っております。

日本竹古風京都籠

縅（おどし）サムライ鎧

つまみかんざし

山越阿弥陀
（半分タイプ）

山越阿弥陀
（原寸タイプ）

京焼　陶器

お問合せ：一般財団法人日本文明研究所〒150-0031　東京都渋谷区桜丘町24-5　電話：03-5456-8082　Mail：info@japancivilization.org